

平成24年12月18日

秩父市議会議長 小 櫃 市 郎 様

市議会だより編集委員長 木 村 隆 彦

市議会だより編集委員会行政視察報告書

1 期 日 平成24年11月14日(水)

2 視察先 埼玉県深谷市

3 参加者 委員長 木村 隆彦 副委員長 大久保 進
委員 金崎 昌之 委員 上林 富夫
委員 新井 豪

4 視察目的

埼玉県深谷市

「編集委員会での業務内容、委員と事務局の作業の分担、発行までの業務の流れについて」

○ 市の概要

平成18年1月1日、深谷市、岡部町、川本町、花園町が合併し誕生した新「深谷市」は、東京都心から70km圏の埼玉県北西部に位置し、東に熊谷市に、南は嵐山町、寄居町に、西は三里町、本庄市、北は群馬県の伊勢崎市、太田市に接しています。人口は約14万7千人で約5万5782世帯が住んでいます。(秩父市人口約6万8千人、約2万6300世帯、平成24年4月1日現在。)

また、「レンガのまち深谷」のレンガ史は、渋沢栄一翁が明治20年につくった日本煉瓦製造会社の工場に始まります。日本煉瓦製造会社の工場は、ドイツ人技師チーゼを招いて操業を始めました。チーゼとその令嬢の住宅として建てられた木造洋館は事務所としても活用され、現在は「旧事務所」という名称で、ホフマン輪窯(わがま)6号窯などとともに国の重要文化財(近代化遺産)に指定されています。

○ 事業の概要

ふかや市議会だよりは、今年5月に地方議会人という雑誌の中の市町村議会広報クリニックに掲載されました。優れている点として「手塩にかけて作った議会広報」であり、議員が主体的に編集に当たり読みやすさを意識した編集技術も優れ、ハイレベルな市議

会広報と評価されていました。秩父市議会だよりにおいても、多くの市民の皆様を読みやすく興味を持って分かりやすい議会だよりを作成するため、深谷市議会だより編集委員会の皆様への視察をお願いいたしました。



【深谷市議会だよりの創意工夫 木村 隆彦】

深谷市の議会だよりへの視察は、秩父市を含めて今までに4自治体だそうです。視察の目的は、各地域の議会だよりの担当者に見てもらっても、やはり発行することだけでなく中身の充実を図り、より多くも市民の皆様に見ていただきたいという一緒の思いだと感じました。深谷市の取り組みとして、読みやすくするために表紙をカラーにして目を引くような写真を掲載し、表やグラフを使い目から導入させる工夫や、2色刷りを有効に使用するために色の濃淡により立体感を出せるように工夫がされていました。また、編集委員会も議会初日より開催され、発行までに4回の委員会を行うとのことでした。第1回目の委員会では、ページの割り振りを行いどの議案を掲載するか事前に予測し、質問内容も含めて検討を行うとのことでした。また、一般質問の掲載に関しては質問者に任せ、答弁においては担当部局で確認し編集委員会はチェックを行っていないとのことでした。その時間は見出しを含めて、内容の充実を図っているそうです。

また、市で発行される市報は審議の結果を市民に知らせていますが、議会だよりは審議がどのように行われ、どのような意見があり、どのような質問があり、賛成、反対討論といった審議の過程を掲載することが市民に対しての責務であると強調していました。今後の秩父市の市議会だよりにおいても多くの市民の皆様に関心を持っていただき、議会の内容をより分かりやすく伝えられるように、今まで以上に市民の皆様に関心を持っていただく議会だよりを作っていきたいと感じました。

【深谷市議会を視察して 大久保 進】

秩父市議会だより編集委員会として、市議会だよりの先進地の深谷市議会の編集委員会を視察させていただきました。深谷市の議会だより委員会の皆さんが市民の皆さんに読んでもらうためには、どうしたらよいのか、秩父市では1回の発行で3回の編集会議で終了するのに対して、深谷市では4回の編集会議を開き議会初日から編集方針を決める会議を開いているこれによりスムーズに編集作業が行われているような感じがする。

編集委員の皆さんが市民の方がどうしたら読みたくなるかという工夫を試行錯誤しながら、現在の形になってきたようである。編集委員の発想の転換、できないときめつけないこと、やればできる事を勉強してきました。たとえば、専門用語ではなく普段使用しているわかりやすい言葉を使って表現している、市民の方も読みやすくなるし、今までわからなかった事も、わかるようになってくれば自然に市政に関心を寄せてくる事と思います。表紙もカラーにして目を引くような写真を掲載していく。文字の大きさも、見出し・リード文等大きさを変えて読みやすくしたり、2色刷りの技法をうまく活用している。いろいろ秩父市でも試してみる必要な事が多いと感じた視察でした。これから我々も市民の皆さんに読んで頂けるように努力と工夫を積み重ねていきたいと思えます。

【読みたい議会だよりは議会活性化と密接不可分 金崎 昌之】

「秩父市議会だより」の紙面づくりの参考にと、深谷市を訪ねた。今年になってすでに4回の視察を受け入れているほど注目を集めている「ふかや市議会だより」。数年をかけて徐々に現在の紙面へと変えていったとのことだが、配られた2008年版と今年11月発行の最新号とを比べると、違いは一目瞭然だ。その編集委員会委員長の最初に挙げた紙面づくりのキーワードが「魅せる」で、まずは表紙が2色刷からカラーになっている（さぞかし費用がかさむのかと思いきや、交渉で値段は据え置きとのこと）。次いで中身に目を移すと、記事の割り付けやタイトルの表現に、わかりやすく、興味を引く工夫がされている。記事自体も、2008年版はあれもこれもそのまま羅列したように見えるが、最新号は選択と集中とでも言うのか、ポイントを絞って記事にしている感がある。

しかし、いくら読みやすさを追求し、目先を変えても、そこに載せる議会での議論内容が読者である市民の切実な思いとずれ、興味を引くものでなかったなら、いずれは見向きをされなくなるだろう。だが各常任委員会・議会運営委員会から2名ずつ、計10人で構成するという「ふかや市議会だより」編集委員会は、その点でも先駆的だった。議会前、今回の議会ではどの点がポイントとなり、どんな討論があるのか、いわば想定問答を行うというのだ。

果たして、「報告」という役割の域を越えた市議会だよりが、議会そのものの充実・活性化へと有機的に結びつき、まさに「魅せる」市議会だよりづくりが、市民にとって「魅力ある」市議会づくりへと繋がっている。

【「議会だより」視察について 上林 富夫】

「議会だより編集委員会」において深谷市議会の「議会だより」が大変すばらしいとの話をいただき10月14日、深谷市議会へ視察に行ってきた。たしかに読みやすく工夫されている箇所が随所に見られることや表紙がカラー化されているなど市民の関心を得る努力がされていることが解る（カラー化しても料金は同じとの話）。大変、良い「議会だより」と思うが実際にはどれ程の市民の方が読まれているかなどをお聞きしたがアンケートを実施したいと思っているがまだ、行っていない。出来るだけ早く実施したいとの話であった。ただ、内容の性質上、多くの市民の方に興味を持ってお読みいただくのはどこでも難儀していることは変わらないようである。

「議会だより」への記載方法においては原則、委員会において原稿チェックは行わない模様なので秩父市議会でも採用したら委員会での手間が省けてよい。市民の方も議員作成の原稿がそのまま、見ることができ良いと思う。議員は緊張感を持って原稿作成をすることになり大変良い。



【市報は「結果報告」、議会だよりは「経過説明」 新井 豪】

「議会だより編集委員会」の委員になって6年、この間に秩父市の「議会だより」も大きな変貌を遂げてきたと自負している。「多くの市民皆さんに解りやすく伝える」という命題で、少しずつ改良されてきたが、まだまだ理想には遠いと思っている。そこで深谷市議会の編集委員会の視察となったが、「市報と重複する記事の削除」、「専門用語の改善」、「全体の網羅ではなく、関心の高い記事の記載」等々、我々と多くのコンセプトが共通していた。しかし、何より大きなインパクトを受けたのは「結果を掲載するのが『市報』、経過を説明するのが『議会だより』」と割り切って編集構成をドラスティックに変えたところである。

我々の議会だよりにおいては、例えば、殆どの市民が読んでいないだろう「委員会報告」のページなど、その改編を私は以前から主張してきたが、今回の視察によって殆どの委員がそれに賛同して頂けるだろうと期待を持てる視察となった。

秩父市議会は県内でも「議会改革」が大きく進んでいる先進市になりつつある。その姿を現すような冊子にして、他市から視察に来られるような「議会だより」にするという目標を達成し、そろそろ編集委員を引退したいと思っている。

